

ねぎの苗立枯病（病原の追加）

平成 30 年 3 月、渡島地方のハウス栽培ねぎ（育苗期・地床育苗・播種 1 ヶ月後）で、不出芽および出芽後の立ち枯れ症状が発生した。病変部から分離した糸状菌の菌糸幅は 7.2~10.4（平均 8.7） μm 、核数は 4~14 個、菌糸は分岐を有し、分岐部がくびれ、分岐部付近に隔壁を有した。分離菌は *Rhizoctonia solani* Kühn AG-1~5 の標準菌株のうち AG-2-1 と高頻度、AG-2-2 IV と低頻度で融合した。分離菌は 5~30℃で生育し、25℃および 30℃における菌糸伸長は 11.6~11.7mm/24 時間および 0.4~0.6 mm/24 時間であった。分離菌の DNA からは AG-2-1 特異的プライマーを用いた PCR 法で DNA 断片が増幅された。また、分離菌の rDNA-ITS 領域の塩基配列を解析し系統解析を行った結果、分離菌株は *R. solani* AG-2-1・Subset1（培養菌叢に基づく分類では培養型Ⅱ）に所属することが明らかとなった。地床育苗を想定して分離菌を播種と同時にネギに接種したところ、不出芽および出芽後の立ち枯れ症状が再現された。一方、チェーンプット育苗を想定して、分離菌を播種 1 ヶ月後のねぎに接種したところ、葉鞘部の腐敗が生じたものの立ち枯れ症状は発生しなかった。接種による発病部からは接種菌が再分離された。以上のことから本症状をネギ苗立枯病と同定した。接種試験の結果から本症状は、地床育苗でのみ発生すると考えられた。我が国では、ネギ苗立枯病の病原として AG 未同定の *R. solani* が報告されているのみであり、*R. solani* AG-2-1・Subset1 による同病の発生は国内・道内で確認されていない。

（道南農試・（株）ホクサン）



ねぎの苗立枯病（角野氏 原図）